

# コンピュータ&エデュケーション Vol.000

## 目次

- 「CIEC会誌創刊準備号」発行に寄せて CIEC設立準備委員会委員長 奈良 久
- 特集 米国と日本の高等教育におけるコンピュータ利用の実際
  - PUC~PCCからCIECへ ~「すべての人のためのコンピュータ」をめざすPC  
カンファレンスの到達点とその発展・課題~ 4
  - 「いつでも、どこからでもコンピュータで ~コーネルネットワーク~」  
(95PCカンファレンス/コーネル大学のボロナ氏の講演) 7
  - 「アメリカの教育・研究用ソフトウェア開発 ~現状と展望~」  
インテリメーション社 ベッキー氏 12
  - 「大学におけるネットワークの教育利用」  
電気通信大学大学院 岡本 敏雄 16
  - EDUCOM'95レポート&プレゼンテーション  
信州大学医療技術短期大学部 矢部 正之 20
  - 96PCカンファレンス開催のご案内 24
- コンピュータと研究 活用事例
  - グラフから数値を読む 25  
鳥取大学 松浦 興一
  - マックでスライド作成のコツ 27  
鹿児島大学 坂井 雅夫
  - 計算機利用の発表提示補助について 29  
秋田大学 中村 彰
- ソフト紹介
  - Stat Partner (統計学習ソフトウェア) 30
  - Green (マルチメディア オーサリングツール) 34
  - Mac Web STAR (WWWサーバソフト) 38
  - U.S Education Ware Best 100 (教育・学習・研究用ソフトウェアコレク  
ション) 42
  - ISOP (日本語カードプロセッサ) 46
- 論文発表

ライフサイエンス辞書2の制作 京都大学 金子 周司	51
ネットワークを用いたコースの開発例と問題点 獨協大学 立田 ルミ	56
マルチメディア教材作成ツールとその応用 金城学院大学 中田 平	62
インターネット環境における大学や附属学校の教育実践 新潟大学 小林 昭三	68
簡易オーサリングツール MacLang4.5 による自作 CALL 教材の開発 立命館大学 津熊 良政	73
WWWサーバの授業活用について 信州大学医療技術短期大学部 鈴木 治郎	78
総合理科「電子琵琶湖博物館」の試み 滋賀県立日野高等学校 小西 浩之	83
<b>● CIEC設立にあたって</b>	
めざすもの 設立趣意書	88
設立にいたる経過 基本構想	89
呼びかけ人一覧	90
CIEC会誌論文執筆要項	94
団体会員からのメッセージ	95
編集後記	96
CIEC設立賛同同意書	

## 論文タイトル一覧

- [ライフサイエンス辞書2の制作](#)
- [ネットワークを用いたコースの開発例と問題点](#)
- [“HyperCard Lessons” とマルチメディアフランス語教材 “デジタルAllons-y!”](#)
- [インターネット環境における大学や附属学校の教育実践](#)
- [簡易オーサリングツール MacLang4.5 による自作CALL教材の開発](#)
- [WWWサーバの授業利用について](#)
- [総合理科『電子琵琶湖博物館』の試み](#)

## 概要

---

## ライフサイエンス辞書2の制作 ～生命科学用語データベースの構築と辞書の公開およびネットワーク利用～

金子 周司 (京都大学薬学部薬理学講座)

生命科学領域で常用される英語と日本語の学術用語を収集した「ライフサイエンス用語データベース」(LifeSciDict) の大改訂について報告する。主な改訂作業は(1)専門領域を互いに異にする20名の研究者による辞書モニターの実施、(2)学術論文中に出現する単語の頻度分析による頻出語の補充、(3)意味情報・訳語の優先順位・先頭発音情報などの付加、を含んでいる。この改訂によって、日本語見出しで25,000語、英語見出しで29,000語を収録した改訂版 LifeSciDict が完成し、公開用「ライフサイエンス辞書2」の元とした。辞書を公開するにあたっては、これまでのかな漢字変換辞書、英和・和英電子辞書、英和逐次変換辞書に加え、新たにスペルチェック辞書、さらにそれぞれについて Macintosh 版のみならず可能な限り MS-DOS ないし Windows 対応版を制作した。これらのライフサイエンス辞書2シリーズはすべてネットワーク上で公開され、8カ月間で延べ4,000以上のダウンロードがあった。

**キーワード** ライフサイエンス / 学術用語 / 辞書 / 電子辞書 / かな漢字変換 / データベース英語 / スペルチェック / フリーウェア

**連絡先** 〒606-01 京都市左京区吉田下阿達町 京都大学薬学部薬理学講座 金子周司 ([skaneko@ddb.j.nig.ac.jp](mailto:skaneko@ddb.j.nig.ac.jp))

---

## ネットワークを用いたコースの開発例と問題点 ～イリノイ大学での茶道のコースを開発して～

立田 ルミ (獨協大学)

Mosaic がイリノイ大学で開発されて以来、インターネットの利用が急激に増えた。本稿ではネットワーク基盤の整ったイリノイ大学で、日本文化のコースを開発した経験を基に、ネットワークの教育利用の方法について論ずる。また、コース開発の上で設計における留意点と、利用者からみた利点、問題点について言及する。現在このコースは英語版の三章が完成しているが、今後この部分についての日本語版を開発し、新しい章については利用者の意見をまとめてより使い易いコース設計を行い、追加する予定である。

---

## “HyperCard Lessons” とマルチメディアフランス語教材 “デジタルAllons-y!” ～マルチメディア教材作成ツールとその応用～

中田 平 (金城学院大学文学部)

筆者は1989年から1894年まで、Macintosh を使いながら学生に「教養演習」という授業

科目のなかで HyperCard を教えてきた。また、1992年から1995年現在、文学部英文学科の専門科目で「英語教育工学」という科目を担当している。そこでもやはり、HyperCard ベースの教育を行ってきた。HyperCard を教育の中心に据える理由の第一は、かつての PC における BASIC のように、Macintosh にはハードウェアを購入すると無料でバンドルされるソフトウェアとして HyperCard があったからである。しかし、理由はそれだけではない。HyperCard が、いわゆる HyperText のコンセプトをもっとも早く実現したソフトウェアであったからだ。筆者は HyperCard をコースウェアとして構成したいという念願から、1992年からの「英語教育工学」の授業を自作のコースウェアで行っていた。1994年6月にブラザー販売から出版された“HyperCard Lessons”はこの「英語教育工学」の授業の中心教材として開発されたものである。ここでは、情報教育のあり方の一つとして、マルチメディアを意識したオブジェクト指向プログラミング言語としての HyperCard の観点から、HyperCard Lessons の構成を論じる。また、その応用として著者によって開発され、ユニテ(株) から出版されたフランス語教材“デジタルAllons-y!”を紹介する。

**キーワード** 情報教育 / HyperCard / コースウェア / マルチメディア教材 / フランス語教材

**連絡先** 〒463 名古屋市守山区大森2-1723 金城学院大学文学部 中田 平  
( [nakata@kinjo-u.ac.jp](mailto:nakata@kinjo-u.ac.jp) )

---

## インターネット環境における大学や附属学校の教育実践

小林 昭三 (新潟大学教育学部理科教育教室)

新潟大学・教育学部・附属学校園におけるインターネット環境の整備の経過と実際について報告する。そこでの具体的な教育実践をもとに、日常的なインターネットの活用と情報教育の進展には不可分の関係にあることや、大学で学生が日常的にインターネットを活用できる環境が必要なことなどが浮き彫りにされよう。さらに、近隣の小学校や中学校や高校においても、PPP 接続によるインターネット接続が開始されてきた経過や、不自由な電話回線という制約にもかかわらず、急速な進展と成果がもたらされることが期待されている実状が述べられよう。近年では民間のレベルでの商用のインターネットの利用が急伸しているが、こうした民間の進展にまかせるだけでなく、公共の施設には公的なインターネット整備が不可欠となる理由についても言及されよう。

**キーワード** インターネット / WWW / NII / 学内LAN / ATM-LAN / マルチメディア / ネットスケープ / ワークステーション / パソコン / PPP接続 / 10baseT / 情報教育

**「CIEC会誌創刊準備号」発行に寄せて**

CIEC設立準備委員会委員長 奈良 久 青森公立大学教授・東北大学名誉教授

CIECの会誌創刊準備号発刊に際しましてご挨拶申し上げます。このような立派なCIEC 会誌創刊準備号ができましたことを心から喜びたいと思います。と同時に、執筆下さった著者の方々と、短い時間の間に創刊準備号をまとめて下さったCIEC会誌創刊準備号編集委員会のご努力にお礼申し上げます。

ご承知のように、全国大学生生活協同組合連合会（大学生協連）は、1993年以来毎年1回のペースでPCカンファレンスを開催して参りました。このカンファレンスでは「教育とコンピュータ」に関わる広域な問題について真剣な討論が行われました。過去3回のPCカンファレンスの広がりや成果は積極的に評価されるべきですが、同時にまた、従来の形態のPCカンファレンス開催には限界も見えてきたように思います。そして関係者の間で、PCカンファレンスの遺産を正しく引き継ぎ、「教育とコンピュータ」に関するあらゆる問題について恒常的に討論し、提案し、さらには夢を語る機会を確保するにはどうしたら良いかが検討されてきました。いろいろな経過がありましたが、結局新しくCIEC（Council for Improvement of Education through Computers）という組織を作ろうということになり、昨年秋にCIEC設立準備委員会は、基本的には「教育とコンピュータ」の問題を恒常的に考える組織であるCIECの設立に情熱を持つ方々が自発的に参加して組織されています。思いがけなく私が委員長を務めることになりました。この重任を果たせるかどうか、心もありませんが、関係者のご協力を得て微力を尽くしたいと思います。よろしく願います。

第1回のCIEC設立準備委員会は、昨年10月28日に開催されました。そこではCIEC設立の具体的作業を進めるためのいくつかの委員会を発足させました。CIEC会誌創刊準備号編集委員会もその一つです。編集委員会を含めて各委員会は、その任務に応じて設立準備作業を精力的に進めて下さいました。多くの委員会は、インターネットのメーリング・リストを活用して作業を進めました。ネットワーク上を飛び交う各委員会の討論や作業状況を私も拝聴（拝読？）しておりましたが、熱気あふれた議論と効率の良い作業の進捗状況は誠に印象的でありました。設立準備委員会委員長としての在り方は、いろいろあると思います。強烈な個性を発揮して、CIEC設立という目的に向かって、場合によっては委員会を強引に引っ張っていくというのも一つの在り方でしょう。しかし各委員会は自主的に活動下さって、効率よく準備を進めて下さっています。各々の任務を持った各委員会にすべてをお任せして、私は必要に応じて若干の調整やまとめをすればよいと感じています。一つの例をあげれば、このCIEC会誌準備号も、私自身はほとんど何の関与もしないのに、編集委員会独自のご努力で立派に発刊に漕ぎつけました。ありがたいことだと感謝しています。

CIECの設立総会は'96PCカンファレンス（1996年7月5日（金）～7日（日）、於早稲田大学）の会期中に執り行う予定で準備を進めています。つまり厳密に言うとCIECという組織は現在はまだ存在していません。したがってCIECの組織全体やその性格がすべて確定しているわけではありません。しかし間もなく設立されるCIECには、今までにない際立ったいくつかの特徴があると思います。その特徴は、○CIECは「教育とコンピュータ」に関わるあらゆる問題を恒常的に取り上げる。○その際大学の問題のみの限定せず、幅広く幼児初等

教育から生涯教育に至る問題を視野に入れたい。○経験の交流と相互学習を基礎とするが、可能な限り学会的性格も合わせ持つような組織にしたい。とまとめられると思います。これは単に私の個人的な期待というよりは、CIEC設立準備に携わるすべての方々の共通理解であると信じています。したがってCIECは「教育とコンピュータ」を担い、支え、そして考えるあらゆる人々と団体に対して開かれたユニークな組織であり、これらの人々と団体の集結を目指したいと考えております。アメリカのEDUCOMやCAUSEという組織に学ぶところは多いのですが、CIECはこれらの組織のクローンを目指しているではありません。追いつくべきところではできるだけ早く追いつき、そして追い越して、世界のなかで真にユニークで影響力のある組織に育ってほしいと期待しています。

最後になりましたが、CIECと大学生協の関係について述べさせていただきます。CIEC 設立への気運の盛り上がりは、大学生協連が主催した過去3回のPCカンファレンスを抜きには考えられません。CIEC設立準備委員会も、大学生協連の文字通りの物心両面のご支援により、ようやくCIEC会誌創刊準備号を刊行できるところまで来ました。

立派なCIEC会誌創刊準備号ができ上がりました。さらに立派な会誌創刊号を発刊し、これを真に影響力のある会誌に育てていかなければなりません。そのためにはなによりも CIEC に結集される皆様のご協力が必要です。ご投稿はもちろんのこと、この会誌創刊準備号のご意見、さらに創刊号や続号のCIEC会誌についての積極的なご提言を心から期待しております。ご協力をお願いします。